

博士学位請求論文審査報告

2018年2月14日

申請者 申知瑛

論文題目 比較に抗して：1945年前後の朝鮮・台湾・日本の接触思想と対話的テキスト

審査委員 鵜飼哲 イ・ヨンスク 星名宏修

1 本論文の構成

本論文は植民地期および脱植民地期の朝鮮、台湾および日本の思想状況を、知識人および民衆の複合的な視点から立体的に解明することを目的とし、歴史、文学、思想史、文化史など多様な角度からのアプローチを総合した領域横断的な研究である。検討の対象は演説会、集会、座談会の記録から1945年前後の自伝的小説、証言、ルポルタージュに記録された風聞や噂にわたり、これらのテキストの発掘・読解の作業を通して、台湾と朝鮮の知識人の間、日本と朝鮮の炭坑労働者の間の接触の様態から、「解放」後の朝鮮の南北分断過程における新たな異族意識の形成までが考察される。

本論文は以下の各章から構成される。

序論

第一章 研究目的と対象

- I. 研究目的——(元)被植民者間の接触思想
- II. 研究対象——対話的テキストと風聞的ルポルタージュ

第二章 研究史検討と研究方法

- I. 研究史検討
- II. 研究方法——被植民者の接触思想：崔一秀、森崎和江、フランツ・ファノン

本論

第一章 対話的テキストにおける被植民者同士の「比較」と「共感」

- I. 「比較」に抗して
- II. 比較の位階——「中央（文壇）」が配置した台湾と朝鮮
- III. 比較の連鎖——いない時にもいる「中央文壇」と植民地的感情
- IV. 共感と差異——「どうにもならない」居心地悪さ、「ふるへてゐる」翻訳
- V. 闇の中に——植民地の特異性とよその言葉

第二章 植民地博覧会における複数の地方化と被植民者の両面性

- I. 複数の地方化と複数の時間性
- II. 帝国の博覧会から拓殖博覧会へ——植民者による、また被植民者同士による地方化
- III. 植民地の地方化と被植民エリートの「欲望を伴う拒否」
- IV. 植民地内部の地方化と地方民・原住民の「積極的受動性」
- V. 植民地群衆の二つの形態——博覧会でのもう一つの時間性
- VI. 博覧会でのもう一つの時間と植民地群衆の発話——沈黙、狂気、凶行、悲鳴

第三章 聞こえてきた「解放・独立」「コーフク」と風聞的レポルタージュ

- I. この時期を何と呼べるのか
- II. 「脱植民地化の代行」という言説に対して
- III. 「聞こえてきた」玉音放送と翻訳・変形の不／可能性
- IV. 脱植民地化のメディア、「風聞的レポルタージュ」

第四章 ソウルと台北の「風聞的レポルタージュ」——金南天と龍瑛宗の自伝的小説・随筆

- I. 風聞的レポルタージュ——解放期の自伝的小説(及び随筆・日記)の特性
- II. 街の自伝的小説『1945年8.15』——朝鮮における脱植民地化と「イデオロギー対立」の間
- III. 感情と表情の自伝的小説・随筆——台湾における脱植民地化と再植民地化の間

IV. 朝鮮人少女の自伝的随筆と「玉音放送」の空白——李申善「八月十五日」

第五章 北九州炭坑からの移住・帰郷を扱った「風聞的ルポルタージュ」と抵抗的浮遊性——安懷南の自伝的小説と上野英信の「あひるのうた」

- I. 聞こえてきた「解放・独立」と移住・帰郷の不／可能性
- II. 風聞的ルポルタージュと朝鮮人炭鉱徴用労働者の棄民化
- III. 噂の歴史性と異族の葛藤——安懷南の移住・帰郷の経験と「炭坑」「鉄鎖切られる」
- IV. 移住・帰郷の不／可能性と「内国棄民」の発生——安懷南の「馬」「島」「火」
- V. もう一つの「アリラン部落」——上野英信の「あひるのうた」
- VI. 「帰郷」が「逃走」になる時——「解放・独立」の噂と異族村の抵抗的浮遊性

第六章 満洲からの移住・帰郷と異族になった北と南——廉想渉の自伝的小説、座談会、北朝鮮紀行文

- I. 消えた「アジア」、露になった「民族」、形成される「異族」
- II. 風聞的ルポルタージュと事実と風聞の混淆——自伝的小説・集团的ルポ・北をめぐる風聞
- III. 「近い異族」の間の葛藤とアイデンティティー・スイッチ——廉想渉の帰郷・移住を扱った自伝的小説
- IV. 「わたしたち」という境界の再形成と揺れ——北と南の「集团的ルポルタージュ」座談会
- V. 競争する風聞、競争する事実——『以北通信』創刊号と「北朝鮮踏査記」
- VI. 完結し得ない解放期のメディア、風聞的ルポルタージュ

【結論】

参考文献

2 本論文の概要

序論の第1章では本論文の研究目的が、これまでの帝国研究の成果を踏まえつつ、被植民者相互の「接触」の可能性、不可能性の領域を新たに問題化することにあること、そのために分析の対象とされるのが、著者が「対話的テキスト」と総称する演説会、集

会、座談会の記録と、「風聞的ルポルタージュ」という名称のもとにまとめられる、噂など非人称の民衆的、集合的発話が記録されたテキスト群であることが明示される。

続く第2章では、森崎和江、崔一秀、フランツ・ファノンの著作を参照しつつ「接触」という概念の理論化が図られる。森崎和江は「民衆における異集団との接触の思想 - 沖縄・日本・朝鮮の出逢い」(1970)において、底辺労働者層のなかの異集団同士が、植民地主義・国家・資本に媒介されながらも相対的に自立的な「接触」を実現する可能性を模索し、「他者は比較級なしに出会えるか」という問いを立てた。この問いが、本論文の第一の問題設定となる。しかし森崎は(元)宗主国の労働者と(元)植民地の労働者との間の位階に十分な注意を払っていないことも指摘される。一方、1950年代後半に活躍した韓国の文芸批評家・崔一秀は、韓国の民族文学を東南アジアの弱小民族(タイ・ビルマ・インドネシア・マレーシア・ヴェトナムなど)の文学との連繋性において考察した。そこから著者は、本論文の第二の問題設定として、「脱植民地性は他者性と共存できるか」という問いを立てる。さらに、マルチニック出身の精神科医でアルジェリア独立闘争に参加したフランツ・ファノンが『黒い皮膚・白い仮面』(1952)で記した「ニグロとは比較である」という命題から、内面化された植民地主義的規範が(元)被植民者間の関係に及ぼす持続的影響の分析視覚が引き出される。「比較に抗して」という本論文の表題には、以上三つの問題設定が集約されている。

本論文では最初に一連の用語の再定義ないし定式化が行われる。「接触」は直接的な身体接触だけでなく、政策・制度・労働システムや言説による強制的な接触をも含み、それと同時に被植民者同士の共感の潜在性を探るための用語とされる。また移動のベクトルが帝国や国民国家内部に固定された「帰国・帰還」「引揚げ」という言葉に換えて「移住・帰郷」という表現が採用される。また、1945年8月前後という時期の過渡的性格が強調され、「脱植民地化の代行」という支配的な表象を批判的に再検討し、自主的な脱植民地化への模索と異族認識の変化を考察するために、朝鮮での「解放・独立」と台湾での「降伏・光復」が、噂や風聞を通じて民衆的・集团的に解釈される過程が、「聞こえてきて／伝えられていく」時間性として規定される。

本論第1章では、「他者は比較級なしに出会えるか」という問題設定のもとで、植民地期における座談会などの「対話的テキスト」における発話行為が分析される。その際に著者は、朝鮮人作家・金史良と台湾人作家・龍瑛宗が交わした書簡における二つの表現、「ふるへてゐる(手)」と「どうにもならない(自分の血に流れてゐる伝統的精神)」に着目し、この表現と類似した発話が、植民地の「特殊性」論争や翻訳不可能性等が問題となる文脈で、台湾と朝鮮の文人の発話に繰り返し同型的に登場することを指摘する。この分析を踏まえ、帝国文壇の力学のうちに呪縛された台湾と朝鮮の文人の間の「接触」が、「比較されながら共感し、競争させられながら連累していく」状況としてまとめられる。この章の結論では、金史良の「光の中に」(1939)と龍瑛宗の「宵月」(1940)の間の相互テキスト性が分析され、とりわけ金が龍に宛てた書簡で示した作品観を手がかりに、台湾文人と朝鮮文人の間の「特異性(singularity)を通じた共感」が確認される。

第2章では、植民地博覧会をめぐる感想文・記事・漫画・懇談会などを素材に、植民地博覧会で出会った(元)被植民者の間に人種主義的観念が刻印されていく過程、しかしまた抵抗感がさまざまな形で表明される過程が分析される。被植民エリートは近代的諸価値の誇示の場である博覧会を欲望しながらも、それ自体が植民地主義の一部であることが認識されると強い拒否反応を示す。この反応が「欲望を伴う拒否」と規定される。朝鮮の地方出身者及び台湾の原住民は博覧会や「文明」に好奇心を持って接近するが、しばしば極度の驚愕や恐怖に襲われ、甚だしい場合には発狂、破産に至るケースまでが確認される。こうした反応は「積極的受動性」と規定される。被植民者の博覧会に対する反応はこのように、台湾でも朝鮮でも、エリート層と周縁的な民衆層がそれぞれ異なる「両面性(ambivalence)」を示しており、著者はそこに潜在的共感の可能性を探る。また朝鮮人作家・廉想渉の「狂奔」(1929-1930)と台湾人作家・朱点人の「秋信」(1936)を参照して、植民地博覧会に植民地主義に包摂されないもう一つの時間が流れていたと主張する。

第3章では1945年8月前後を断絶よりも連続の相に力点を置いて把握することで、脱植民地化の原点となる時期を考察する新たな方法が模索される。著者は1945年8月15

日に朝鮮と台湾で玉音放送が「聞こえてきて／伝えられていく」過程における元被植民者たちの翻訳・変形・専有行為 (appropriation) に着目し、台湾と朝鮮では脱植民地化が帝国の敗北によって代行されたという言説の批判的な問い直しを図る。また朝鮮における「解放・独立」、台湾における「降伏・光復」が「聞こえてきて／伝えられていく」状況が読み取れる「風聞的ルポルタージュ」が発掘・整理される。朝鮮については街の声がそのまま含まれたアンケートや宣言文、座談会などが分析される。台湾については、「再植民地化」の状況下で新聞・雑誌の日本語欄が、国民党政権に対する批判、台湾人の内面の吐露、街の声を伝えるメディアとして機能したことが論じられる。これらの分析を通じて、1945年8月前後の時期の、脱植民化への希望と再植民地化／占領化という絶望を共に味わった、台湾と朝鮮の同時代性が浮き彫りにされる。

第4章では脱植民地化への希望と再植民地化・占領化の絶望とが共存した朝鮮および台湾の状況が、朝鮮人作家・金南天の自伝的小説「1945年8.15」(1945-1946)と台湾人作家・龍瑛宗の単編小説および随筆の検討を通じて考察される。金南天の「1945年8.15」は、1945年8月末から10月までの期間、ソウルで飛び交っていた噂・風聞・ビラ、デモや集会の様子、新聞報道などが小説の中に取り込まれている点で「風聞的ルポルタージュ」とみなされる。そこには、「与えられた」解放が翻訳・変形・専有されるにつれて自主的な政治体制が模索されていく過程と、北と南の分断が次第に深まっていく過程が同時進行的に観察される。また龍瑛宗の随筆「二人乗り自転車」(1946)「台北的表情」(1947)からは、当時の台北の街の表情・声・ビラなどが読み取られる。また小説「汕頭から来た男」(1945)「燃える女」(1946)「哀しき鬼」(1946)は、三作ともに伝聞ないし会話という構造を持っている。それは様々な立場の台湾人の当時の感情の聞き書きであるが、最終的にはその会話の相手は皆死んでしまう。ここには希望と憂鬱、脱植民地化と再植民地化が重なり合った状況が濃密に映し出されている。

第5章では(元)宗主国の労働者と(元)植民地の徴用労働者の「接触」が論じられる。主に検討の対象とされるのは北九州の筑豊炭坑に強制徴用されたのち「移住・帰郷」する朝鮮人徴用者を描いた安懐南の自伝的小説と、1950年代に北九州の炭鉱地帯に

点在した「アリラン部落」が描かれている上野英信の自伝的かつルポルタージュ的小説「あひるのうた」(1953)である。安懐南の自伝的小説「炭坑」(1945-1947)「鉄鎖切られる」(1946)において朝鮮人徴用者が「玉音放送」を聞く様子や民族間の葛藤の噂には、現実の朝鮮人徴用労働者の証言と強い類似性が見られる。「馬」(1946)「島」(1946)「火」(1946)では、「移住・帰郷」を試みるが不在の間に土地が奪われていた等の理由によって元の農民の生活に戻ることに失敗する人々が登場する。著者は安懐南のこれらの小説が描き出す世界が、上野英信が「あひるのうた」で記録した、「移住・帰郷」に挫折し元宗主国の底辺に生きることを強いられた朝鮮人の集住空間である「アリラン部落」に接続可能であると考え、そこには元宗主国の労働者と元被植民地の労働者が、炭坑労働において代替的な関係に置かれながら、生活のなかで出会いを模索し挫折する過程が示されている。最後に著者は、炭坑に関連する「風聞的ルポルタージュ」に労働者の逃亡・逃走のモチーフが頻繁に登場することに着目し、その意味を「もうひとつの生」を希求する民衆による、「解放・独立」の集団的解釈の分析に繋げ、元宗主国の労働者と元植民地の労働者に通底する「抵抗的浮遊性」の状況と規定した。

第6章では植民地期に作られた位階が元被植民者の間に人種・階級・ジェンダー・イデオロギーに起因する葛藤を増幅させる過程が分析され、アジア熱戦(冷戦)による南北分断のさなかのさまざまな社会的知覚が検討される。満洲から朝鮮北部を経てソウルに至る「移住・帰郷」を扱った廉想渉の自伝的小説には噂・風聞・見知らぬ声、民族間の殺害事件が報告されており、外見上差異のない異族間の「アイデンティティ・スイッチ」の問題が表現されていることが強調される。またアジア熱戦(冷戦)によって「異族」の境界が朝鮮内部の北と南の間に再設定されていく過程が、雑誌『新天地』の座談会の「集団的ルポルタージュ」形式の分析を通じて論じられる。それと共に北朝鮮に関する風聞や旅行記が登場し、風聞と事実と主張が競合しながら北朝鮮をめぐる言説が形成されていく過程が記述される。そして当時の南北朝鮮の関係には停止不可能な動揺と相互翻訳性が持続していたことが確認され、分断状況を南北いずれでもない「第三の眼差し」で考察する方途が模索される。

結論では本論文で遂行された作業が、著者の理論的立場、各章の要約、採用された方法と分析結果の順に整理される。続いて残された課題として、韓国、台湾、日本におけるこれまでの植民地研究の検証、東アジアという地理的限定を超えた、ロシアからインドネシアまでの広がりでの1945年前後以降の(元)被植民者の民衆的経験の研究、近代という時代的限定を超えた、風聞・噂と文学的生産の関係の系譜学的研究、「解放・光復」期の文学者座談会の分析、女性を書き手とするテキスト群の系統的な検討等が挙げられる。そして最後に、ベネディクト・アンダーソンの『比較の亡霊』(1998)を参照し、フィリピンの作家ホセ・リサールの小説から引き出された「比較の亡霊」という表現に即して、「接触」において「比較」は不可避であるが、この不可避性のなかで「位階」的ではないような「比較」の模索もなされてきたことが指摘され、そのような模索の痕跡が、本論文で著者が「対話的テキスト」「風聞的ルポルターージュ」と呼ぶテキスト群のなかに追跡されたことが確認される。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は第一に、従来の帝国研究が主として植民地支配における植民者と被植民者間の諸関係を対象としてきたことに対し、同じ植民地帝国の別の植民地出身の知識人および民衆の間でどのような相互認識が可能だったのかを問題にし、この問題設定に見合った解釈格子の構築を試み、内面化された植民地的規範を基準とした「比較」に対する抵抗の諸相を読み取る作業を行ったことである。この作業の創発性、独創性は積極的に評価しうる。

第二にこの作業が、これまで一般的には学問的検討の対象とならず、ともすると二次的とみなされてきた座談会やアンケート、新聞記事等の資料を独自の解釈格子に即して広汎に渉猟し、植民地期、脱植民地期の思想状況を、風聞や噂などの非人称的な民衆的、集团的発話を重視して再検討したことである。韓国語が母語である著者にとってこの作業は日本語および中国語の高い運用能力を証明するものであり、とりわけ台湾の植民地期文学研究の分野で斬新なアプローチを示したことは賞賛にあたいする。

とはいえ、これらの成果の裏面として、以下の問題点が指摘されなければならない。第一に、新たな研究領域を開拓しようとする野心的企図が、歴史研究において基本的に踏まえらるべき認識枠組みの軽視につながり、被植民者同士を出会わせた植民地的権力を過小評価する傾向が見られることである。この傾向は解読格子の構築段階での森崎和江の議論の位置づけについても、いくつかの留保はつけられているものの、優勢であるとみなさざるをえない。

本論文の第二の問題点は、扱う領域が歴史的にも地理的にも過度に広がってしまい、歴史的経緯の記述や文献読解の作業がややもすると荒削りになり、それが歴史的事実の誤認、風聞や噂のレベルとすでに確定されている歴史的事実のレベルの識別の失敗などのかたちで、朝鮮、台湾、日本のいずれの文脈においても若干例見出されることである。結論には今後の作業としてさらに対象地域を拡張する意図が記されているが、なされるべきはむしろ、本論文で設定された時間的・空間的限定のなかで、より平明な文体で、しっかりした根拠に基づいて議論を組み立て直すことであろう。その際、本論文で構築が試みられた解読格子についても、比較をめぐる方法論的な議論、準概念的に用いられるさまざまな定型表現を含め、総体的に再考する必要がある。

問題点の第三として、結論でその欠落が指摘されてはいるが、当該の時代および地域における女性の発話の分析が総じて乏しいことが指摘しうる。ジェンダー的観点を理論的な枠組みに適切に位置付ける作業が、今後の著者の仕事にとって喫緊の課題となるだろう。

とはいえこれらの問題点は、真摯な文献調査に基づく誠実な知的探求の結実としての本論文の学問的価値を否定するものではなく、本論文が、著者が高度な学識の持ち主であることを証明する事実に変わりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2018年2月14日

受験者 申知瑛
最終試験委員 鵜飼哲 イ・ヨンスク 星名宏修

2018年2月2日、学位請求論文提出者 申知瑛氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「比較に抗して：1945年前後の朝鮮・台湾・日本の接触思想と対話的テキスト」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、申知瑛氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、申知瑛氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。